

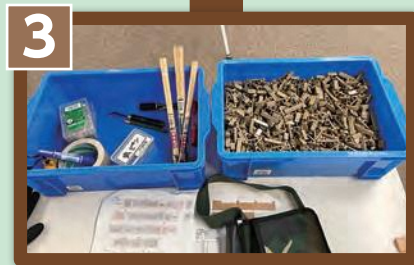
THE GALLERY

- もくじ ■特集|美術館の舞台裏 ■美術館休館のお知らせ
■企画展|「松本竣介《街》と昭和モダン—糖業協会と大川美術館のコレクションによる—」|水木しげる 魂の漫画展」
■常設展示室から ■学芸員ノート ■今後の展覧会

特集|special issue — 美術館の舞台裏 いわき市小・中学生版画展編

事前準備

- 夏 小・中学校の先生
方を招いた準備会
秋 参加申込
12月 作品の搬入・整理



展覧会ごとに違った表情を見せる美術館の展示室。展覧会と展覧会との期間は、いつもは静かな展示室が一転、限られた時間の中で次の準備をすべく、色々な人やモノが入りし、賑やかになります。今回は「いわき市小・中学生版画展」の準備風景を通してそんな美術館の舞台裏をご紹介します。

毎年1月に開催されるいわき市小・中学生版画展(以下「版画展」)は、いわき市立美術館の開館時から始まり、もうすぐ40年目を迎えます。「いわき市民美術展覧会」への応募が高校生以上と規定されているのに対し、版画展は文字通り小学生から中学生までを対象とし、版画という身近で奥深い技法に親しみながら自分なりの表現を発表する場として続いてきました。

112月半ばまでの企画展の撤収が完了すると、展示パネルを学芸員総出で組み替えて、その後アルバイトスタッフさんたちの力も借りて版画展の作品の展示に取り掛かります。

2**3**ピン、金槌、作品を繋ぎとめるクリップなど、展示に用いる道具たち。担当学芸員力作の平面図をもとに、班に分かれて作業開始。

4個別の作品をクリップで繋いでいきます。色々な展示方法を試行錯誤して、現在はこの方法に落ち着いているとのこと。



5 学校ごとに決められたエリアに貼っていきます。
間違いが無いよう、リストとにらめっこしながら。

6 美術館の秘密兵器、レーザー墨出し器。
レーザーで垂直線、水平線を壁に投影します。
墨出しとは建築工事の現場で基準となる線を引く作業のこと。墨をつけた糸を使ったことが名前の由来のようです。作品をズレ無く真っ直ぐ展示するために美術館では必要不可欠な道具です。

7 どんどん貼っていきます。
学校ごとに色々なテーマ、色々な作品があって面白い。
時々ちょっと見入ってしまうことも。

8 別の部屋でも同時並行で作業。
アルバイトスタッフさんたちの熟練の手つきが素晴らしいです。

9 丸1日かけて、やっと作品の展示が完了！
皆さんの力作がずらっと並んだ様子は壮観です。
全体を見て回りながら、最後の微調整を。

10 展示作業がひと段落したら、次はロビーの体験コーナーの設営。組立式のテーブルが登場です。



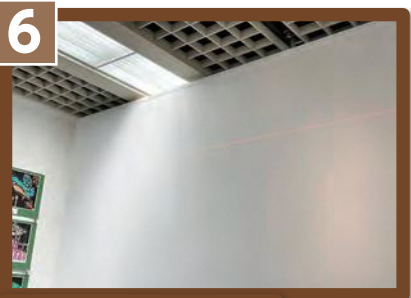
10



9



6



8



5



7





11三階から小さい丸イスを運んで……。

12テーブルを組立て、イスを並べて。

立派なプレス機も実技講習室から出張してきました。

13体験の流れの説明板を貼って。版画展の掲示物は、担当の指示のもと、主にアルバイトスタッフさんが作成しています。

14会期中の体験コーナーはアルバイトスタッフさんたちが中心となって運営します。皆で体験の流れなどを確認。準備は万端。あとはオープンを待つだけです。

普段はお見せない展示会の準備の様子、いかがだったでしょうか。版画展は学芸員とアルバイトスタッフさんたちによる地道な手作業で準備しています。近年、少子化や学校のカリキュラムの変化などを反映して作品数は減少の傾向にある模様。しかし、美術館に展示された自分の作品を見に来館される生徒さんや保護者の方々の表情は本当に楽しそうです。来年もたくさんのご参加、ご来館をお待ちしています。

(編集/主任学芸員 太田紋乃)



◀版画展を見逃しちゃった人は今すぐアクセス!!

<https://hanga22.iwakicity.org/> 360° バーチャルミュージアム いわき市小・中学生版画展



完成!

美術館休館のお知らせ 休館期間(令和4年2月28日～4月22日)

当館は、建物や設備の老朽化対策を計画的に行っており、現在、エレベーター設備更新のため休館しております。ご不便をおかけしますがよろしくお祈いします。

企画展 | 松本竣介《街》と昭和モダン —糖業協会と大川美術館のコレクションによる—

4月23日(土)～6月12日(日)



安井會太郎《女と犬》
1940年
油彩・カンヴァス
公益社団法人糖業協会蔵

公益社団法人糖業協会の日本近代洋画コレクションと、公益財団法人大川美術館のコレクションから、選りすぐりの優品によって、「昭和モダン」をテーマに構成した展覧会です。糖業協会は、昭和11年の協会設立以降、美術品を収集してきました。藤島武二、梅原龍三郎といった日本画壇の重鎮を含む、近代洋画の優品を所蔵しています。一方、大川美術館は、実業家、大川栄二が収集した日本・海外の作家の作品をコレクションの中心として、平成元年に開館しました。松本竣介、野田英夫を中心に収集されたコレクションは、7,500点にのぼります。本展では、松本竣介《街》(1938年)を起点に、激動の昭和という時代を多彩な絵画によってたどります。

企画展 | 水木しげる 魂の漫画展

6月25日(土)～8月21日(日)

『ゲゲゲの鬼太郎』などで知られる日本漫画界の鬼才・水木しげる(本名 武良茂 1922-2015)。

彼は鳥取県境港で過ごした少年時代に、“のんのんばあ”に連れられて見た正福寺所蔵の「地獄極楽絵図」に心を奪われて以来、生涯にわたって不思議な世界を探求し表現し続けました。

激戦地ラバウルで生死の境をさまよい片腕を失い、極貧時代を乗り越え、独自の漫画表現に到達した水木の画業を、300点あまりの漫画原稿や原画、愛用の道具、多彩な映像資料などで紹介します。

探求心と洞察力、緻密な作画によって生み出された水木ワールドが味わえます。



《ゲゲゲの鬼太郎》
1985年
©水木プロダクション

常設展示室から



李禹煥《刻みより》1973年 木 137.3×188.0cm



松田松雄《風景(堤)》1972年 油彩・カンヴァス 33.4×55.5cm

美術にまつわる二つの言説を紹介しましょう。

「技巧が素材にまさっていた(materiam superabat opus.)」(オウィディウス『変身物語』2巻5節)。古代ローマの詩人オウィディウスが、太陽神の宮殿を描写する一節です。金、銀、象牙が使われた宮殿は、その高価な素材によってではなく、鍛冶の神ウルカヌスの施した浮き彫り細工の技巧により、讃えられたのです。素材の高価さにもまして芸術家の技巧に価値を認めるこの一節は、例えば芸術のパトロンが自身の作らせた作品を讃えるために引用されるなど、古代、中世、近世を通して芸術観に影響を与えてきました。絵の具の質感や筆の痕跡が一切見えない、なめらかな表面を持つ写実的な絵画や、石であることを忘れさせるようなリアルな彫刻は、この価値観によく合致した芸術作品と言えるでしょう。

一方、20世紀を代表する美術批評家クレメント・グリーンバーグは、「素材の持つ固有の性質こそが、芸術の本質である」ということを主張しました。印象派から抽象表現主義にいたるモダニズム絵画の発展においては、荒々しい筆致により絵の具という素材を強調することや、カンヴァスという素材の持つ平面性を強調することにより、絵画の自律性、純粋性が達

成されると考えたのです。

令和4年度常設展前期は「素材との対話」と題して、素材に着目して所蔵作品を紹介します。両極端な二つの言説は現代美術においてどのように引き継がれているのでしょうか。「素材」対「技巧」の二者択一とは言い切れない、作家と素材の対話を感じてみてください。

また、小展示では令和2年度、3年度に新収蔵された作品を、既存の作品と合わせて紹介します。当館の現代美術のコレクションを補完する、新たな作品のお披露目となります。どうぞお見逃しなく。

(学芸員 徳永祐樹)

常設展前期

「素材との対話」

令和4年4月23日(土)～10月16日(日)

小展示Ⅰ「新収蔵作品を中心に Vol. 1」

令和4年4月23日(土)～7月18日(月・祝)

小展示Ⅱ「新収蔵作品を中心に Vol. 2」

令和4年7月20日(水)～10月16日(日)

学芸員ノート | いわきを描いた作品

当館は、いわきの美術を収蔵・研究の対象としている。これまで、地域の美術史を検証する展覧会や地元作家を紹介する展覧会を開催するほか、いわきゆかりの作品収集を行ってきた。収蔵作品の中にはいわきの風物を描いた絵画が含まれていて、来館者の眼を引くこともしばしばだ。かつての炭砒を描いた作品を前に、あるいは特徴的な建物を望む昔の風景画を指しながら、懐かしそうに会話する人々の姿をよく見かける。わたしたちがそんな来館者に、描写場面にまつわる情報や思い出話を教えてもらったことも一度や二度ではない。地元の景色が広がる作品は、画家の視点でとらえた時代の息吹や生活感にあふれていて、人々の郷愁を誘ってやまない。

一方で、描かれた場所や物が特定しきれない作品もある。たとえば、平成30年度に受贈した中西一路の《小名の濱小屋》。屏風仕立てのこの作品は、戦後いわきの日本画を牽引した中西が昭和15年に制作したものだ。漁具や海産物が置かれた小屋の中から外を眺める少女の後ろ姿。外には白くまぶしい砂浜が広がり、遠くに岬が仄見える。少女のモデルは中西の長女と思われ、実際には平のアトリエで描かれた。

市内の港町小名浜の発展に大きく貢献した家柄に生まれた寄贈者によると、同作品は幼い時分から自宅にあり、亡くなった親族が入手したと推測されるものの、詳しい経緯等は分からないという。タイトルと寄贈者の出自を考えれば、小名浜の浜辺に建つ小屋を描いたとするのが自然だが、市内に取材した同様の題材は他に見たことがないため確証が得られず、作品が描かれた背景も不明だ。

今やいくつもの埠頭が並ぶ規模となった小名浜港だが、昭和30年代前半までは港のそばに海水浴場もあったらしい。



中西一路 《小名の濱小屋》 1940年 墨、顔料・紙 194.5×181.0cm
「第5回大潮會展」出品作

昭和15年頃の砂浜に、漁具の保管や作業に使われていたとされるこのような浜小屋が建っていたのだろうか。食糧不足だった終戦前後は自家製塩に使用していた小屋もあったと聞くと、制作年との間には少しズレがある。当時の写生か、それとも過去の景色なのか。抑えた色調の画面に込められているのは、変わりゆく浜への惜別の情なのか、未来への希望なのか。とても気になる作品なのだ。

(学芸課長兼学芸係長 竹内啓子)

今後の主な展覧会のご案内 (新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、中止や延期、または内容等に変更が生じる場合があります。)

改修工事のための休館
2月28日(月)～4月22日(金)

企画展 松本俊介《街》と昭和モダン
—糖業協会と大川美術館のコレクションによる—
4月23日(土)～6月12日(日)
水木しげる 魂の漫画展
6月25日(土)～8月21日(日)

常設展前期 「素材との対話」
4月23日(土)～10月16日(日)
小展示Ⅰ「新収蔵作品を中心に」 Vol.1
4月23日(土)～7月18日(月・祝)
小展示Ⅱ「新収蔵作品を中心に」 Vol.2
7月20日(水)～10月16日(日)